

科目担当者氏名		科目担当者連絡先 (メールアドレス)	
(ふりがな)	いわぶち あきこ 岩渕 亜希子		
連絡責任者氏名		科目設置機関名	
(ふりがな)	いわぶち あきこ 岩渕 亜希子	追手門学院大学	
授業科目名	科目認定番号	受講者数	
社会調査実習 I A	OTMa-110701-2	10	

I. 調査実習に関するコメント

学生が果たした役割や実習全般に対する感想など；学生が果たした役割：学内調査という所与の条件のもとでの仮説立案・調査票作成、エディティングおよびデータ入力、集計票の作成、分析、執筆。感想：本実習では、実習全体の調査枠組みのもとで、学生が自らの関心を互いに表明し、それを活かしてグループごとのテーマと仮説をまとめあげ、それに沿った調査を行えることを重視しているが、グループワークのマネジメントには困難が多い。

II. 調査の企画・設計 (デザイン)

1. 調査のテーマ/領域：2クラス計21名で計4テーマを設定し1つの調査票を作成した。以下に「くせ (習慣)」グループの概要について述べる。

2. 調査の内容/概要：中学時代の行動習慣を一種の「くせ」ととらえ、その「くせ」が現在の行動習慣にどのように関連しているかを、自立性、協調性、仲間意識の観点から分析した。

3. 調査の範囲/対象 (量的調査の場合は母集団と標本数及びサンプリングの方法を、質的調査の場合は対象者選定の理由を必ず記入)：母集団：追手門学院大学の社会学部生1～3年生 計487名、サンプリング：全数調査 (1～3年ゼミ27クラスを通じた配布・回収)、標本数 (母集団から実習参加者を差し引いた人数)：466名

4. 主な調査項目：中学時代の行動習慣、大学での行動習慣、社交性・協調性 など

III. データ収集の方法と結果

5. データ収集 (現地調査) の方法：1～3年生ゼミの担当教員に対し、受講生自らが調査依頼の交渉を行った。日程調整のうえ、受講生が分担して調査員となり、ゼミを訪問しての調査説明、配布、回収を行った。したがって、自記式、集合調査である (ただし、一部回収箱を利用した留置法を併用)。

6. 調査の実施時期・調査地・調査員の数：調査時期：2011年6月下旬～7月上旬、調査地：追手門学院大学内、調査員の数：学生計21名 (うちAクラス10名)

7. 収集したデータの量と質への評価 (量的調査の場合は有効回収票数及び回収率を必ず記入)：総配布数353、有効回収数：328、配布数に対する有効回収率：92.9%

IV. データ分析の方法と結果

8. データ分析/解釈の方法：SPSSを用いた統計解析 (クロス表分析とカイ2乗検定、相関分析が中心)

9. 調査の成果 (調査から得られた主な知見など)：①中学時代に流されやすかった人は、大学生になっても自立心が相対的に弱い、②ただし、中学時代よりも大学生の自立心は、精神面・経済面の両面で強くなっている、③自立心と協調性を比較すると、中学時代と現在の自立心の関連性がより強く、協調性の方が年齢や環境によって変化していくと考えられる など

10. 報告書刊行の予定と概要：2012年3月に『2011年度 社会調査実習報告書』刊行。Aクラスからは、くせ (習慣) に関する論文6本を掲載。

<記入上の注意点> 1. 調査のテーマ毎に用紙を替えて (3つのテーマを立てて実施した場合は合計3枚に渡って) 記入下さい。

2. 最上部の*印の箇所には数字を (*/*) には、報告書が複数枚になる場合のみ、3枚中の1枚目なら1/3とご記入下さい。

3. 全ての項目について具体的にご記入下さい。但し、1テーマ毎に印刷が必ずA4サイズ1枚に収まるようにして下さい。フォントサイズは変えず (設定してある通り) にして、項目毎に分量に応じて「行の高さ」を変えることで調整していただけましたら幸いです。

4. 報告書はウェブ上で公開する予定です。また、調査実習情報をDB化することも検討しています。ご承知置きの上、ご記入下さい。

科目担当者氏名		科目担当者連絡先 (メールアドレス)	
(ふりがな)	いわぶち あきこ 岩渕 亜希子		
連絡責任者氏名		科目設置機関名	
(ふりがな)	いわぶち あきこ 岩渕 亜希子	追手門学院大学	
授業科目名	科目認定番号	受講者数	
社会調査実習 I A	OTMa-110701-2	10	

I. 調査実習に関するコメント

学生が果たした役割や実習全般に対する感想など：学生が果たした役割：学内調査という所与の条件のもとでの仮説立案・調査票作成、エディティングおよびデータ入力、集計票の作成、分析、執筆。感想：本実習では、実習全体の調査枠組みのもとで、学生が自らの関心を互いに表明し、それを活かしてグループごとのテーマと仮説をまとめあげ、それに沿った調査を行えることを重視しているが、グループワークのマネジメントには困難が多い。

II. 調査の企画・設計 (デザイン)

1. 調査のテーマ/領域：2クラス計21名で計4テーマを設定し1つの調査票を作成した。以下に「音楽とファッション」グループの概要について述べる。
2. 調査の内容/概要：音楽とファッションそれぞれへの姿勢は関連しているのか、関連しているとしたらその接点は何か、という問いにアプローチするため、流行や周囲の目に対する意識の観点から分析した。
3. 調査の範囲/対象 (量的調査の場合は母集団と標本数及びサンプリングの方法を、質的調査の場合は対象者選定の理由を必ず記入)：母集団：追手門学院大学の社会学部生1～3年生 計487名、サンプリング：全数調査 (1～3年ゼミ27クラスを通じた配布・回収)、標本数 (母集団から実習参加者を差し引いた人数)：466名
4. 主な調査項目：ファッションへの関心の強さ、ファッションの流行への態度、ファッションの独自性へのこだわり、音楽への関心の強さ、音楽の流行への態度、音楽の独自性へのこだわり など

III. データ収集の方法と結果

5. データ収集 (現地調査) の方法：1～3年生ゼミの担当教員に対し、受講生自らが調査依頼の交渉を行った。日程調整のうえ、受講生が分担して調査員となり、ゼミを訪問しての調査説明、配布、回収を行った。したがって、自記式、集合調査である (ただし、一部回収箱を利用した留置法を併用)。
6. 調査の実施時期・調査地・調査員の数：調査時期：2011年6月下旬～7月上旬、調査地：追手門学院大学内、調査員の数：学生計21名 (うちAクラス10名)
7. 収集したデータの量と質への評価 (量的調査の場合は有効回収票数及び回収率を必ず記入)：総配布数353、有効回収数：328、配布数に対する有効回収率：92.9%

IV. データ分析の方法と結果

8. データ分析/解釈の方法：SPSSを用いた統計解析 (クロス表分析とカイ2乗検定、相関分析が中心)
9. 調査の成果 (調査から得られた主な知見など)：①ファッションと周囲の目を意識することの間には強い関連があるが、音楽と周囲の目を意識することの間にはそれほど関連は見られない、また音楽でよりもファッションにおいて流行がより意識される。ファッションは対人ツールであるが、音楽は心のゆとりなどに関連する個人的なものではないか、②しかし、音楽の流行を意識することと、ファッションの流行を意識することには明らかな正の相関がみられる、つまり、予想に反して、個性にこだわらない層においてこそ、ファッションと音楽はより強く結びついている
10. 報告書刊行の予定と概要：2012年3月に『2011年度 社会調査実習報告書』刊行。Aクラスからは、音楽とファッションに関する論文5本を掲載。

<記入上の注意点> 1. 調査のテーマ毎に用紙を替えて(3つのテーマを立てて実施した場合は合計3枚に渡って)ご記入下さい。

2. 最上部の*印の箇所には数字を(*/*)には、報告書が複数枚になる場合のみ、3枚中の1枚目なら1/3とご記入下さい。

3. 全ての項目について具体的にご記入下さい。但し、1テーマ毎に印刷が必ずA4サイズ1枚に収まるようにして下さい。フォントサイズは変えず(設定してある通りにして)、項目毎に分量に応じて「行の高さ」を変えることで調整していただけたら幸いです。

4. 報告書はウェブ上で公開する予定です。また、調査実習情報をDB化することも検討しています。ご承知置きの上、ご記入下さい。